

師匠から教わった 門外漢が 理解すべきこと



佐藤 泰一

SATO Taichi

北海道銀行
音更支店長

スッと背筋が伸びる。

「文化が違う？ 君は理解することを放棄していないか、思考を停止させるんじゃない！」真剣に叱ってくれた職場の上司の眼差しを鮮明に思い出す――。

秘かに「師匠」と呼んでいる社長がいる。初めて訪問したとき、無表情に一蹴された。

「佐藤さんは勉強が足りないよ。そんなプレゼンでは私の琴線には触れられない。出直しなさい」

恥ずかしくて、悔しくて、図書館で郷土史を読み、北海道庁や役場にレクチャーを受け、日本公庫とディスカッションし、農水省の白書や公表数値、巷間の先行事例をあさった。事業承継、規模拡大、6次産業化、福利厚生、雇用確保、補助制度活用、自治体連携……。自分なり

さとうたいいち

1970年北海道生まれ。92年北海道銀行入行。アグリビジネス推進室長を経て2018年より現職。少年サンデー連載の「十勝ひとりぼっち農園」を愛読中。北海道農業経営アドバイザー連絡協議会「かけはし」所属。

の認識と展望を持って、再度の面会を得た。「よく勉強してきたね。でも、まだまだ。全然足りないよ。まあ、今日は現場を見ていきなよ」

ニコッと笑って、牧場そして昔の事務所に案内された。その壁には、

「銀行員に農業は理解できないよ、文化が違うからね」スッと背筋が伸びる。

北海道銀行の経営理念には、「進取創造：創造と革新を追求し、活力ある職場から魅力あるサービスを



©伊東 剛

「全然足りない」理由が、太く、大きく墨書されていた。「私たちはあなたの乳牛です。よい牛にもなれば悪い牛にもなります。私たちの運命は酪農家任せなのです」

経営理念だった。土や牛に触れる生活をしていない自分には及びもしないその考え方に衝撃を受けた。「師匠」は私に、机上のデータが示す「文字と数字」に「血と体温」が宿っていることを教えてくれたのだった。後にそれは、『酪農家キニーの牛飼いの哲学』の引用と知った。

提供します」というフレーズがある。理念の積み重ねが文化をつくり、文化の積み重ねが風土をつくる。農業も、工業も、商業も、基本的な財務は変わらない。収益構造も同じだ。ちょっとした商慣習の違いを、文化が違うと諦めてはならない。

「相談があるから、顔を見せにおいでよ」にこやかに出迎えてくれる社長の手には、極寒の原野を切り拓いてきた苦勞と誇りが刻まれている。今日も牛舎の彼方に見える日高山脈は、雄々しく美しい。F

■ 農業経営アドバイザー

農業経営者のニーズに対応し、経営への総合的で的確なアドバイスを実践する専門家です。2005年、農業経営の発展に寄与することを目的に日本公庫（当時、農林漁業金融公庫）が資格制度を創設しました。本コーナーは、上級資格である上級農業経営アドバイザーが執筆します。